

黒毛和種の栄養度判定における効果的な指導法の検討

中 島 良 文

目 的

黒毛和種繁殖牛の繁殖率を高めるためには、栄養度判定が重要な技術となる。このため、本調査では栄養度判定法を学生に効果的に指導するための基礎的な資料を得ようとした。

材料と方法

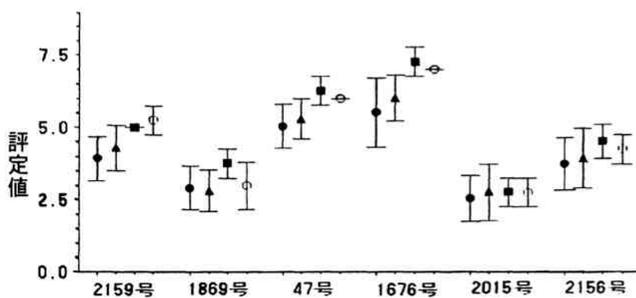
黒毛和種繁殖牛6頭(2159号, 1869号, 47号, 1676号, 2015号, 2156号)を用い, 1993年度の生物生産学科生17名と場員4名で各個体について, 学生と場員間及び反復間の違いを検討した。

栄養度の判定は9ランクとし, 判定部位は背骨・肋骨, き甲・腰角・でん部及び尾根部の4部位としその部位の脂肪蓄積状態により判定した。栄養度の総合判定値は, 4部位の単純平均により求め, 少数第1位を4捨5入した。

結 果

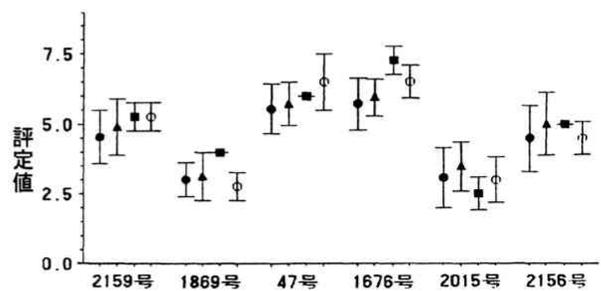
背骨部位の判定値は栄養度が高い牛で学生と場員間で差が認められ, 学生は低く評価する傾向が認められた。しかし判定値の低い個体では学生と場員間での違いは少なかった(第1図)。肋骨部位の判定値は背骨部位の判定値とほぼ同様な傾向が認められた(第2図)。キ甲部位の判定値は学生と場員間の差が認められる個体が多く, キ甲部位の判定が学生にとっては困難であることが推察された(第3図)。腰角部位の判定は背骨部位の判定とほぼ同様な傾向が認められ, 栄養度の高い個体で学生が低く評価する傾向が認められた(第4図)。でん部及び尾根部の判定は学生と場員間で差は認められなかった(第5図, 第6図)。その結果総合判定値は栄養度の高い個体で学生と場員間で差が認められた。しかし, 反復間では差はほとんど認められなかった(第7図)。

これらの結果から, 栄養度の判定法を効果的に指導するには, 特にキ甲部位の判定が学生にとって困難であることが推測された。また, 栄養度の高い牛の判定基準を更にわかりやすくする方法を検討する必要があると考えられた。



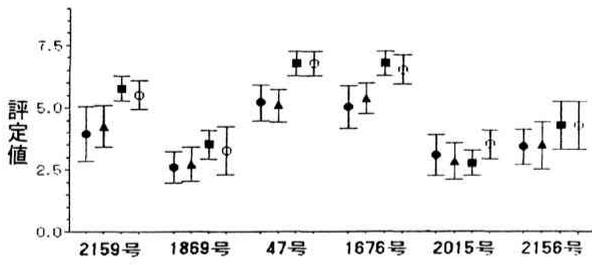
第1図 背骨部位栄養度評定値の学生・場員・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



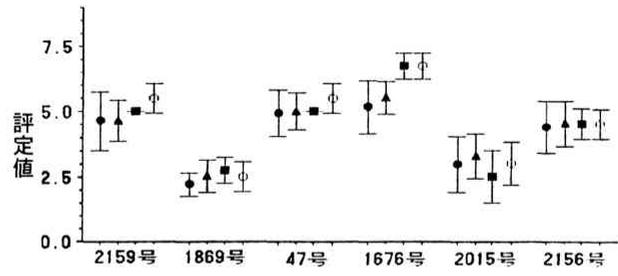
第2図 肋骨部位栄養度評定値の学生・場員・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



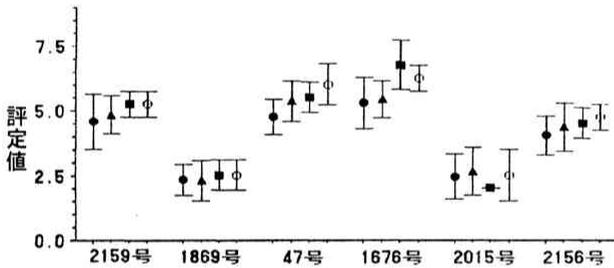
第3図 キ甲部位栄養度判定値の学生・場員
・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



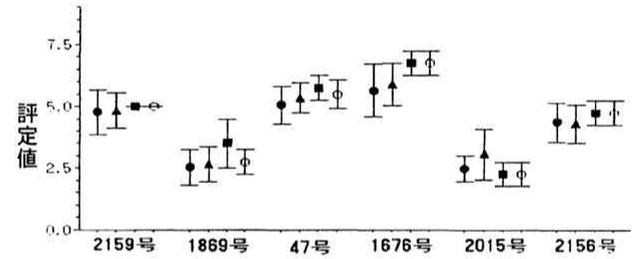
第4図 腰角部位栄養度判定値の学生・場員
・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



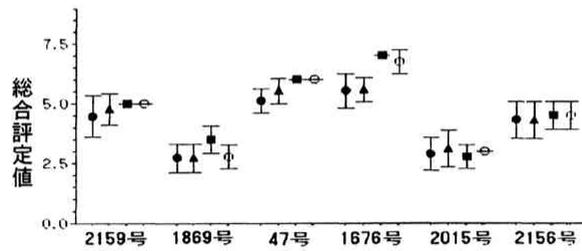
第5図 でん部位栄養度判定値の学生・場員
・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



第6図 尾根部位栄養度判定値の学生・場員
・反復間の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目



第7図 栄養度判定値の学生・場員・反復間
の違い。

●：学生1回目 ▲：学生2回目
■：場員1回目 ○：場員2回目